

数学科研究部

① 研究部の研究内容

ア 今年度の研究目標

研究テーマ「新しい時代に必要となる資質・能力を育む算数・数学教育
～キャリア教育の視点から主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～」

イ 研究内容

年度当初は、第1回研修会で研究テーマの周知とテーマに沿った内容の講演を予定し、第2回研修会では2年かけて研究した研究推進委員の研究発表と第3回研修会の授業研究についての授業づくりを全部員で行い、第3回の研修会では4人の授業者の学校で授業研究を行い、研究を深めていく予定であった。

しかし、第1回と第2回が中止になり、第3回も予定していた授業研究ではなく、雄踏中の体育館をお借りして講演を行うこととなり、ここでは、来年度から始まる3観点による評価・評定の付け方について研修した。昨年度まで指導課指導主事であった齋藤隆治先生（河輪小）の講演を聞くことで、来年度の評価・評定について考えるきっかけにしたいと考えた。

ウ 講演のポイント

(ア)「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に取り組む態度」の三つの観点で評価し、評定を出す。

(イ)「主体的に学習に取り組む態度」の評価は単に継続的な行動や積極的な発言で評価をするのではなく、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど、自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかどうかという意志的な側面を評価する。

(ウ)先生に判断してもらって、できたかどうか分かるという姿だけでなく、自分で判断してこれが正解なのだ自信をつけていく姿を目指す。

(エ)粘り強く課題に取り組む姿勢を育成していきたい。自分のやり方がうまくいかなかったら、もっと別のやり方はないかと自己調整して考える姿を目指す。



齋藤先生による講演

② 研究の成果と課題

今年度は、計画した研究を進めることができず、消化不良なところもあった。そうした状況でも、各部員には普段の授業を、より最適化できるように自己研鑽を進めることを周知した。休校期間もあり、授業時数の確保が課題であった中でも、子供たちに授業内容を確実に習得させるとともに、内容のスリム化を図る必要があったためである。この点では、例年の研究とは違い、より実践的な研究を進めることや、深めることができた1年であった。

今後、各部員の実践力の高まりとともに、これまでとは違った観点での研究や、子供たちにこれまで以上に還元できるような研究になっていくことを期待している。ピンチはチャンスとして前向きに捉え、来年度からの新学習指導要領の全面実施に向け、今年1年が価値のあるものであったと言えるようにしていきたいと考える。

(文責 数学科研究部長 太田 亮平)